

氏名	堀 井 茂 男
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1849 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和62年12月31日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	アルコール依存症者の研究 第 1 編 アルコール依存症者の予後 — 特に適応状況の移動について — 第 2 編 アルコール依存症者の内観療法
論 文 審 査 委 員	教授 庄盛敏廉 教授 何川 涼 教授 森 昭胤

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

入院アルコール依存症者（「ア」者）65名の予後状況を 2 回に分けて調査・検討した結果、短期予後状況（6 カ月－2 年 6 カ月）に比べ長期予後状況（3 年 5 カ月－5 年 5 カ月）では全体として社会適応群は減少し、死亡群が増加していたが、個々の状況をみると適応状況の変化する群（「予後変化－不確定－群」）が43%から75.5 %に存在した。この「予後変化－不確定－群」の多いことは注目され、治療的アプローチを考えると、また予後を研究する場合にはこの点に留意する必要がある。治療に関しては、断酒会に関連したものが重要であったが、内観療法（集中内観）の治療効果の有意差は認められなかったものの、内観療法の施行は断酒意欲の獲得、断酒の継続に有用であることが推測された。内観療法の効果は自己本位の発見を端緒として真の治療的罪悪感を得ることにあり、内観療法と断酒会、Alcoholics Anonymus（A.A.）を有効に利用すればアルコール依存症からの脱却が大いに期待される。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究はアルコール依存症者の予後と治療について臨床的に調査・研究したものであるが、従来十分に検討されていなかった長期間における反復観察による予後状況の変化と、新しい精神療法である内観療法の有用性について重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。